幸福の絵

佐藤愛子

新潮社版

幸福の絵

佐藤愛子

幸福の絵

一九七九年 三月 五日 発行
一九七九年一一月一五日 八刷

定 価／九八〇円
著 者／佐藤愛子
装 画／星 襄一
発行者／佐藤亮一
印刷所／二光印刷株式会社
製本所／神田加藤製本
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(03)二二六六-五一一一
編集部(03)二二六六-五四一一
郵便番号 一六二
振替 東京四-八〇八
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Aiko Satô, 1979 printed in Japan

幸福の絵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一　章

1

その時も私は書斎で机に向っていた。

一日いっぱい、朝から夜半まで机に向って原稿を書いていることが、その頃の私の生活だった。私の机が向いている窓の外には、空と、隣家の二階の屋根と、右寄りに、その屋根よりも高く何の樹か、冬も夏も葉を落さない、ただ真直に背が高いだけの立木が一本、何の趣もなく立っている。窓を額縁としたその風景を、私は見飽きていた。だが原稿に詰ると私は目を上げてその樹を見た。仕事の依頼や打合せや、進捗具合を訊ねて来る電話に答える時も、その樹に目が行った。その樹が私に何かの慰めを与えてくれるというわけではなかったけれども。

その時、原稿を書きながら、私は階下で門のチャイムが鳴るのを聞いていた。(私は何もかも忘れて原稿に没入したということがない。学校から帰って来た町子の気配、郵便配達人が速達や書留を持って来た気配、母と家政婦の険悪な空気、訪問客の車が門前に止った気配、半ばそれらに心を止めながら原稿を書くことが習慣になっていた) チャイムは一度鳴り、間を置いてまた鳴

った。その鳴らせ方を、なぜかふと、遠慮がちに感じたことを憶えている。家政婦が買物に出て留守であることを私は知っていた。知っていたが、そのまま机に向っていた。台所の戸が開く気配がしている。母が出て行ったのだ。

やがて階段を億劫そうな足音が上って来た。

「立子」

母の声が、階段を上ったところから聞えた。

「比呂子が来たんだよ」

母は私の書斎の入口に立って、低く抑えた声でいった。

「中山の……比呂子が」

母は入口に立って、私を見下ろしていた。

「どうする?」

私は頸を捻って母を見上げた。手に万年筆を握ったまま。そして私は自分の顔が無表情を作ろうとしていることを意識した。私が無表情を作ろうとするとき、人の目には不機嫌に見えることを私は知っている。

「チャイムが鳴るから出てみたら、表に立っていて、中山比呂子ですっていうんだよ。だからいったんだよ。あなた、ここへ来たりしていいんですか、って……」

私は母から視線を外らして、あの樹を見た。

「そうしたら、いいんですっていうから……」

母はいった。

「どうする？」
お母さん、あなたはそういう人だ、私は樹を見つめたまま思った。母の頭の中はどんな時でも「ことの筋道」というもので一杯になっている。私の娘が、母にとっては孫が、会いに来たのだ。突然、十数年ぶりに来たのだ。なのにあなたはいう。
「どうする？」
と。
「どうするって？」
私は樹に目をやったまま反問した。母は今、私たちが比呂子と会うことが、ことの筋道に叶っているかどうかを考えたのだ。
「じゃあ断れっていうの？　お母さんは？」
母は口ごもった。
「だって、中山では承知の上なのかどうか……」
そういってから母は、私の怒りの気配に気押されたようにいった。
「一応、応接間には通しておいたけどね」
私は原稿用紙の上に万年筆を置いた。
「会うわ——」
そういって立ち上った。
私は部屋を出て、階段に向って歩いて行った。歩きながら自分の表情を意識した。むっと力んだ顔になっているにちがいない。私は十数年ぶりに我が子と会うのだ。嬉しいのか嬉しくないの

か、よくわからなかった。むしろ気持は重かった。私はどんな風にして捨てた娘に会うのか？最初の一言のむつかしさが私を億劫にしていた。この数年、私は比呂子のことを忘れて生きて来たのだ。比呂子が何歳になったのか、そんなことも指を折って数えなければ、すぐには思い浮かばない。比呂子に会いたいと思ったこともなかった。比呂子を含むすべての過去を忘れていた。驚くほどきれいに忘れているので、時たま人に問われたときは、過去はまるで、私の前世の出来ごとであったかと思えるほど遠い混沌の中に漂う風景として、少しずつ浮かび出て来るのだった。

こんな時、子を捨てた母親は、どういう言葉で捨てた子と再会するのだろう。十何年も昔に呼んでいた「ひィちゃん」という呼び方でその名を呼べば、後は熱い感情の波が自然に言葉を運んで来てくれるのかもしれない。おそらく別れていた母と子は、激情に身を委せることによって、二人の間に穿たれた溝を越えるのであろう。

だが私は「ひィちゃん」と呼ぶことが出来なかった。その名を私はあまりにも長い間口にしなかったのだ。彼女のことを人にいう時、「置いて来た子供」という風にいった。そうして語りながら、私は忘れかけている夢の話をしているような気がしたものだった。

私は階段を下りて行った。冒頭の言葉が思い浮かばぬままに、討論の席に進んで行く時のようだった。泣きたくない、と私は思っていた。階段を下りるとすぐ応接間だ。私はドアを開けた。そうして、

「いらっしゃい」

といった。落ちついた声だ、と思った。私の顔は笑っていた。いつも来客と会うこの部屋に入るとそうなるように、その笑顔によって私は別人になった。落ちつき払ったゆったりした身ごな

しでソファに腰を下ろし、そんな自分を意識しながらにこにこと比呂子を見た。比呂子は腰を下ろしていた長椅子から立ち上り、我を忘れたように私の顔に目を当てていた。彼女は笑ってはいなかった。

「突然、何って……」

私に目を当てたまま気持のいいアルトがいった。

「比呂子です」

「よく来てくれたわね。まあ、大きくなって……」

私は声にもさばさばした、明るい笑いを漂わせた。

——うまく行く……

私は思った。

それが秋の半ば頃であったことを、私はその時、比呂子が着ていた薄手の、ココア色の半袖セーターで思い出す。セーターの丸い襟ぐりから、白い尖ったブラウスの襟が出ていた。アイロンのかかった白い襟はいかにも学生らしく爽かだった。スカートは朽葉色で、それはココア色のセーターとさりげなく合っていた。私はまず、そんな比呂子に満足した。

私と比呂子は丸テーブルを挟んで向き合っていた。比呂子は左手に庭からの鈍い光線を受け、私は右手から同じ光を受けていた。私は微笑した。そうして改めて、

「皆さん、お元気？　おじいさまも？　おばあさまも？」

と訊ねた。何年か前に比呂子の祖父に当る人も祖母に当る人も、相継いで亡くなったというこ

とを、風の便りに聞き知っていたのだけれども。
それから私はさりげなく、もうひとつの、重たい名前を口にした。
「貴志ちゃんはどうしているの？」
「お兄さんと私、今、一緒に住んでるんです。青山にお父さんがマンションを借りてくれたので……。お兄さんはN医大へ行ってます。来年は卒業ですけど」
「あなたも大学？」
「ええ、私も医大です。J医大」
「そう」
私はいった。
「二人ともえらいのね」
「私、二浪してやっと入れたんです」
私はまだ微笑していた。抑制するために微笑することが必要だったのだ。なぜ抑制するのか、わからぬままに。おそらくそれが私という人間なのだ。しかし私は意志して抑制したのではない。むしろ抑制せずにいることの方が私にはむつかしかった。抑制する方がらくだった。抑制を外すと、際限なく弱さが流れ出て来るだろう。私にはその自分を収拾する自信がなかったのだ。
比呂子が着ているココア色のセーターは、見るからに柔らかそうで、平凡だが高価なものらしかった。比呂子は豊かに育ったのだ。彼女の服装の、ひけらかすところの少しもない、学生らしくさっぱりした好みは、豊かで穏やかな育ち方の中ではぐくまれたものであることが窺われた。パーマネントをかけないで、細い柔らかそうな髪を七三に分けて肩の上で切り揃えている。化粧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

気がなく、色はそう白い方ではないが、肌理の細かな肌が、少うし日焼けしたような感じの小麦色だった。

私はそんな比呂子に満足した。この子は皆から気だてのいい娘だと褒められるだろう。そしてまた、美しい娘だともいわれているだろう。比呂子は私の問いかけに学生らしくハキハキと答えながら、私の顔に据えた視線を、一度も外そうとしなかった。その目は大き過ぎると感じるくらいに大きく見開かれて濃い睫に縁どられ、まるで幼な子が珍らしいものを見つけた時のように、我を忘れて私を見ている。この大きな目は大き過ぎて、却って彼女の美しさを減らしているのではないかと私は思う。彼女の祖母、かつて私の姑であった人もこんな風な大きな目で、大胆に相手を凝視する癖があった。比呂子の目鼻立ちが大まかなのは祖母譲りだと思いついたとき、微かな失望が私の胸をよぎったが、しかし、比呂子は花でいうならば、日まわりの花のように大きくて派手な美人だった。やはり私はそれが嬉しかった。

私たちは和やかに、さっぱりした調子で話し合った。恰も長い外国旅行から帰って来た姪が、叔母を訪ねでもしたように。母は時々、飲み物や菓子を持って来ては話に加わり、席を外したり、また現れたりしていた。私たちは三人とも、感傷的でも情緒的でもなかった。といってお互いに儀礼的だったわけではない。比呂子は本当は医大ではなく、音楽学校へ行きたかったのだというようなことも話した。高校の音楽の先生が惜しがって、是非とも、声楽の方へ進むようにと勧めてくれたのだが、お父さんがどうしても許してくれなかったんですといった。

私のかつての義弟であった耐二は、父祖代々の医業を継いで中仙道の山あいの町で総合病院を経営している。耐二には子供がないので貴志と比呂子を自分の籍に入れ、二人を病院の後継者に

しようと考えているのだ。
「お兄さんも、ほんとうはお医者になるの、いやだったんです。でもお父さんはそういう点では……」
「頑固なのね」
と私はわざと軽く言葉を受け継いだ。
「そうなの、とっても……」
その時だけ、今までの淡々とした比呂子とは違う、ムキなものが滲み出た。
「でも、耐二さんの気持はわかるわね」
私はなだめるようにいった。
「ええ、そりゃあ……」
「お医者になってよかったと、ずっと後になってから思うようになるかもしれないわよ、貴志ちゃんだって……」
「ええ」
すぐに比呂子は肯いた。耐二にとっては、比呂子はすぐにこうして諦めて大きく肯く、素直ないい娘にちがいない。そう思った時、突然、予期せぬ涙が湧いて来た。私は口を噤んで膝を見つめたが、その時比呂子はどうしていたのか、私にはわからない。私が辛うじて瞼の縁に涙をせき止めている間、比呂子はどこを見ていたのか。
先に口を開いたのは比呂子の方だった。比呂子はもとのさばさばした明るい口調で、新聞の消息欄にこの家の地番変更通知が出ていたので、訪ねる気になったのだといった。

「前からお会いしたいと思っていたんですけど、住所がわからなかったので」
「それでは比呂ちゃんは、前から……知っていたのね？　いつ頃から……」
私がいい淀んだ言葉の意味を察して比呂子はいった。
「高校二年のときに友達から教えられたんです。うちの人は何もいいません。あのう……お母さんは病気で死んだんだっていわれてましたから……」
「そう思ってたのね」
「そうしたら友達が、あのテレビに出ている人がお母さんだって……」
話が核心に触れそうになって来たので、私の目は急に乾いた。私はいった。
「びっくりしたでしょう？……」
「ええ、そりゃあ……」
「貴志ちゃんも何もいわないの？」
「ええ」
「貴志ちゃんは覚えている筈よ。別れたのは五歳か六歳だから」
「ええ」
少しの沈黙の後で私はいった。
「じゃあ、あなたが知っているってこと、貴志ちゃんは知らないのね？」
「ええ、知りません」
「じゃあ今日、ここへ来たことも？」
比呂子はとんでもないことだという風に首を横にふった。

「勿論、いってないわ」
「どうして？」
比呂子は笑っただけだった。
「いってもいいじゃないの、いえば？」
比呂子は答えなかった。私は執拗になった。
「ね、おっしゃいよ。いえばいいじゃないの、隠してるなんておかしいわ」
それに対して比呂子は答えず、話題を外らそうとした。
「ほんとは昨日も来たんです」
「昨日も？　ここへ？」
「ええ」
「ここまで来て、どうして訪ねてくれなかったの？」
「昨日は家を探すだけにしようと思ってたから。友達が車を持っているので乗せて来てもらったんです。バス通りのお米屋さんに聞いたら、呆気ないほどすぐにわかっちゃって……それで門の前まで来ました」
「そしてそのまま帰ったの？」
「ええ」
「なぜ？」
比呂子は笑っただけだった。
昨日は家を見に来ただけだった。そうして今日、改めて訪ねる決心をした——私は昨日から今

日までの比呂子の決心のし方を想像した。どんな風にして比呂子は会いに来る決心をつけたのかを知りたかった。比呂子はただ会いたくて来ただけだったのか。なぜ母が自分たちを捨てて中山の家を出たか、そのわけを訊きたくて来たのではないのか？　自分たちが耐えた歳月について、母親に訴えたいものがあって来たのではないのか？

私はいうべき言葉を探した。が、何も出て来なかった。比呂子もいい出さなかった。それについて語るには、私たちはあまりに朗らかに、さっぱりと話をし過ぎたのだ。ハ長調をいきなりロ短調に変えるのに似た困難を私は感じた。私は一生懸命にハ長調を奏で過ぎたのだ。

唐突に私はいった。

「そのセーター、とてもいいわねえ」

「そうですか」

比呂子は顎を引いて、胸のあたりを見た。そうして日まわりの笑顔でにっこり笑った。

「あなたは茶系統が似合うのね。すてきよ」

そういう言葉によってしか、私は比呂子のすべてが気に入ったという表現をすることが出来なかったのだ。

一時間余りいて、比呂子は帰って行った。私と母は門の外まで比呂子を送って出た。門の前には薄汚れた白い古くさい型の車が止っていて、運転席に貧弱なヤギ髭を生やした青年が、仏頂面をして坐っていた。

「おや、お友達が待っておられたの」

と母がいった。
「それだったら上ってもらえばよかったのに……何もいわないものだから、ごめんなさい。お待たせして」
私はいったが、待たされて不機嫌になっているヤギ髭の青年は、にこりともしないで、ちょっと顎をしゃくってみせただけだった。しかし比呂子は男友達の不機嫌など気にも止めぬ風に車の前を廻って、向う側から彼の隣に乗り込んだ。
「さようなら」
比呂子は娘らしい声を張っていった。
「さよなら」
私はいった。
「またいらっしゃいよ」
と母がいった。
「気が向いたらね。いつでもいらっしゃい」
と私はいった。
車は走り出した。比呂子はふり返って手を振った。私は少し見送り、車が角を曲るのを待たずに門の中に入った。それが人を送る時の私のやり方だった。

2

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.